



韓国全羅南道の 旧神社跡地調査報告



金 花子（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程）

毎年、暑い夏の始まりと共に、8月の韓国日刊紙に間違いない顔を出す見出しは、日本政府要人の「靖国神社参拝」があったとか、ありそうだとかいうものである。しかも今年は、さらに「太平洋戦争終結60年」の文字が加わった。韓国留学生として最も気の重い時期に、日本の学术研究チームに加わって旧植民地時代の神社調査の聞き取りをすることとなった。言うに言われぬ不安を引きずっての調査旅行というのが、出発前の偽りのない気持ちであった。しかしそれは杞憂に過ぎなかった。旧朝鮮に建てられた多くの神社の内のごく一部の調査ではあったが、今回の成果は日韓関係史を問い直す上からも新しい視点を加えたものとして大いに評価したい。

今回は、リーダーの中島三千男先生が10年ほど前から取り組み、2003年度からは「神奈川大学21世紀COEプログラム」の一環に組み入れられた「旧植民地の神社跡地調査」のスケジュールに従い、2005年8月4日から13日まで、中島先生・津田良樹先生と工学部建築学科学士の川村武史さんに私を加えた4人で韓国南部の全羅南道での聞き取り調査に従事した。分担は、中島先生が聞き取りと写真撮影、津田先生が神社跡地の図面の作成、川村さんはその助手、私は通訳を兼ねて聞き取りに当たった。

旧朝鮮全域の神社の所在については、『朝鮮総督府官報』彙報欄における神社・神祠の創立・廃止・移転・改修などの許可に関する記事をまとめた『神道史大辞典』（園田稔・橋本政宣編、吉川弘文館、2004年）の付表（佐藤弘毅編）などによって把握することができる。そこには、神社として施設上の要件を満たさない「神祠」という旧朝鮮独自の小さい社殿を含む900余社が示されている。現在判明している海外神社は1600余社であるから、約6割ほどが旧朝鮮にあったことになる。

その中で、全羅南道には、神社・神明神祠・神祠合わせて260社ほどがあったとされる（「神明神祠」とは天照大御神を祭神とする神祠をいう）これは旧朝鮮各道での最大の数値を示している（2位は黄海道の160社、3位は京畿道の140社ほど）、そこで全羅南道を調査地として選

んだのであるが、調査日程の上から260社を全て回することは不可能である。したがって、光州・木浦などの都市と、田園地帯としての和順郡を調査対象地域に設定した。和順郡には神社・神明神祠・神祠の全てが揃っている（計13社）からである。

8月5日から和順郡の聞き取り調査に取りかかったが、事前に中島先生から和順郡宛に、この調査が日本の過去の植民地支配の実態を正しく理解するためのものである旨を明記した協力の依頼状が出されていた。その甲斐あって、郡役所の文化観光課の沈氏に村々の長老を紹介してもらうことができ、5日間で13社中12社と、ほぼ全てを順調に調査することができた。

5日は梨陽面と清豊面、6日は春陽面、道岩面、7日は道谷面、寒泉面、和順面、8日は東面、南面、同福面、12日は二西面と北面、と和順郡の全ての面を調査した。

韓国では旧神社は社殿のみならず鳥居から狛犬に至るまで全て破壊されており（後述の1社を除く）既を知る人も少なくなっている。したがって往時を知る人はほぼ70才から80才以上の老人しかいなく、跡地まで案内してもらうのは内心申し訳なく思ったが、多くの老人は親切にまた怨みを露わに出すことなく淡々と対応してくれた（ただ戦争末期の食糧不足の苦しさや日本人警察の取締りの厳しさについてはほぼ全員から聞かされた）中でも北面のL氏は、戦後足を踏み入れたことがない上、腰を痛めていて遠い跡地まで案内することを嫌ったが、いざ山の道が荒れ果てて言葉だけでは説明しようがないと分かると、杖をつきながら鉈で枝を払いつつ跡地まで連れて行ってくれた。その帰り道も散々山道に迷い、私は恐怖から泣きだす寸前だったが、運よく日が暮れるところでやっと山を出られたときにはほっとした。この献身的な協力には、今、改めて感謝したい気持ちで一杯である。

9日からは都市部の調査へ取りかかった。まず木浦市の木浦文化院を訪問し、光州、羅州の神社も含めた資料を得たが、資料の中には何ヶ所かの神社の写真も載っていた。文化院は文化観光部の所管で、各市に設けられてお

り、歴史専門の職員と郷土の歴史に詳しい老人が詰め、資料も備えてある。ついで10日に順천시、11日に羅州市、12日に光州市を訪れ、神社各1社ずつの聞き取りと図面取りを行った。

村の老人が神社建立や参拝の実態を淡々と口にしたのと違い、都市の公園に集う老人の中には調査目的を疑い「また神社を造り直すつもりか」と怒鳴りつけ、神社調査に対し嫌悪感を激しく示す人もいた。逆に都市のインフォーマントの中には植民地時代のことを嘆きながらも、差別された意識は特にないと発言したり、流暢な日本語で青年時代の思い出を懐かしげに語る人もいた。これは、当時としては少数ながら中・高等教育を受け、学校や就職条件・待遇などでも日本人と「同等」に扱われた経験を持つことによると思われる。

また8月11日には、羅州調査の折に韓国で唯一旧神社の姿を留めている神社として高興郡の小鹿島の神社のことを聞き、急ぎその島へ向かった。この島はそもそも無人島であったが、1916年に朝鮮総統府によりハンセン病患者の強制隔離施設・「小鹿島更生園」が設立され、さらに1936年には、小鹿島神社が創建された。この神社の社殿は、コンクリート造りであったこととその特殊な創立事情のため日本敗戦時の焼失・破壊を免れたものである。今日、ハンセン病の誤まった認識が変わり隔離政策が不要となったことで、病院（療養所）には家族・知人も訪れ、緑豊かな島は観光地として再生されている（帰国後、8月25日に韓国・台湾のハンセン病補償訴訟の判決が東京地裁から出され、日本のマスコミにも大きく取り上げられた）そして、この神社の社殿（内部には何も無い）は、2000年に民族の屈辱の歴史建造物として全羅南道の文化財第71号に指定され、植民地時代の教育資料としても活用されることとなった。

短い調査ではあったがこの調査を通して分かったことは多い。例えば農村地帯である和順郡の神社・神祠の創建は1939年、40年に集中している。これは、青野正明氏「朝鮮総督府の神社政策」（『朝鮮学報』160輯、1996年）によると、1930年代の農村振興運動の展開に加え、1935年以降の総動員体制によって広められたいわゆる「一面一祠」政策の結果であるという。神社跡地の確認に併せて行った聞き取りによっても、神社の建設に当たっては強制労働によって整地、建造がなされ、その

後、神社参拝の強制が行われるなど、インフォーマントの年齢により記憶の鮮明さなどに違いはあるが、当時の実態がいくつも明らかになった。また現在その多くは雑木林に覆われているが、和順郡の神社・神祠の建てられた場所は確認できたかぎりでは全て風水にかなっており、村の中心部を見下ろす小高い山や丘の上に建てられている。一方、都市部の旧神社跡地の多くは現在公園となり、階段のみが残っているなど、農村部とは違った様相を見せている。この対比もまた収穫であった。

このように見てくると、恐らく韓国全土の神社跡地もほぼ同様の結果を示すものと思われるが、いずれにしても今後はさらに調査地点を増やし、また可能となった時点で北朝鮮の神社跡地調査にも着手することが必要なのではないかと考えている。

写真1



和順郡寒泉面の寒泉神祠跡地。
雑木林に埋もれ、かろうじて石段跡等が確認できる。

写真2



高興郡の小鹿島にある旧小鹿島神社。
かつてのハンセン病患者の強制隔離施設「小鹿島更正園」内に建てられた。現在は、屈辱の歴史建造物として全羅南道の文化財に指定されている。